

シスター宇野二恵子に聞く、
宗教教育が伝えるもの

出会い、気づき、つながることを知る学び



宗教教育の根本

——聖心女子学院の教育理念を教えてください。

聖心女子学院の設立母体である聖心会の創立者、聖マグダレナ・ソフィア・バラは、フランス革命勃発十年前の一七七九年、フランスのブルゴーニュ地方のジュワニーという町に生まれました。司祭を目指してパリで学んでいた兄のもとで幅広い教養と学問を身につけ、かつ修道生活を望んでいたマグダレナ・ソフィアは、社会を変えていくために、女性が生

——宗教教育というと宗教科の授業で使うもの、という考え方もあると思いますが。

宗教教育と聞くと、一般的には教理や聖書の勉強、またミサや宗教行事への参加などを思い浮かべる方が多いと思います。もちろんそれらも大切なことです、私たちの目標するものはそれだけではないと思います。

教育学者の佐藤学氏が、教育とは、自分の外の世界との出会いと対話、他者との出会いと対話、自己との出会いと対話によって行われる三つの学びが一体となつて「意味と関係の編み直し」が行われる学びであると述べています。宗教はラテン語では religare、もともとは「再び」という接頭辞 re と「結びつける」という意味の ligare の組み合わせであり、「再び結ぶ」という意味をもつ單語です。人間はさまざまな結びつき、さまざまな関係性によつて自分を知り、いのちを育むものではないでしょうか。出会い、気づき、つながることを知る学び、それが宗教教育の根本なのだと思います。

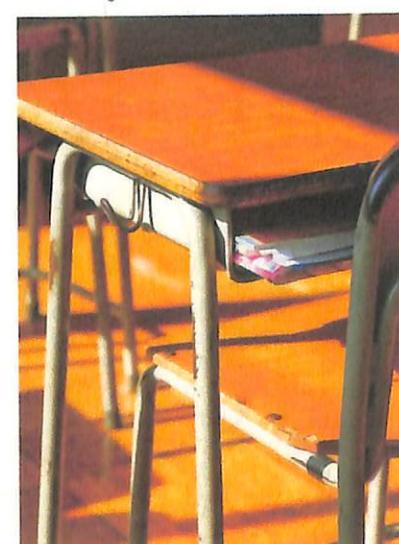
——現代のミッションスクールは信者でない先生方も増え、教員の研修等で苦労しているということも聞きます。

宗教教育の目標すこころは、子どもたちが神の愛を知り、生きていることの意味と喜びを見いだし、いただいた生命を、他者と共に他人のために希望をもつて生き抜く力を開拓することだと思いますので、教育の現場では信者でない先生でも、信者の先生でも、だれもが行なっていると言えます。また、宗教は真理を求めていくことであり、物事の見えるものの奥にある見えないものに目を向けるということですから、物事の本質を見いだす力を養い、真理に向かう心と知性を鍛えるという意味では、すべての授業が宗教教育であるとも言えます。

宗教教育の目標すこころは、子どもたちが神の愛を知り、生きていることの意味と喜びを見いだし、いただいた生命を、他者と共に他人のために希望をもつて生き抜く力を育てることだと思いますので、教育の現場では信者でない先生でも、信者の先生でも、だれもが行なっていると言えます。また、宗教は真理を求めていくことであり、物事の見えるものの奥にある見えないものに目を向けるということですから、物事の本質を見いだす力を養い、真理に向かう心と知性を鍛えるという意味では、すべての授業が宗教教育であるとも言えます。

者でなくとも宗教教育にかかわることは可能だと思います。

——宗教性のない教育は成り立つかと問われたとき、どのようにお答えになりますか。



どうでしょうね。簡

単に答えは出ないと思いますが、教育という言葉が意味するものは何かということにつながるのではなくでしようか。

私は人間の本質には宗教性があると思っています。それは教義や信仰の教えというより、自然に手を合わせると、祈り、願う気持ちはあります。そういうものはだれもが

もつてているでしょう。愛も、信頼も、目には見えません。見えるものをとおして見えないものに触れたり、その感性を磨かないと人に共感する心も育ちません。

しかし、だからと言つて情操的な面さえ伸ばせばいいというものではありません。もちろん心がながりますが、人間は心だけではありません。もちろん教員一人ひとりの宗教理解も、教職員研修も大切ですが、宗教の根本を見誤らなければ、信

●うの・みえこ
聖心会会員。聖心女子大学卒業、上智大学大学院博士課程前期修了、聖心女子学院、不二聖心女子学院、小林聖心女子学院教諭、札幌聖心女子学院校長、小林聖心女子学院校長を経て、現在、学校法人聖心学院理事長、カトリック女子教育研究所所長を務める。

来の力を發揮することが重要であると考えていました。そこでイエスの聖心にささげられ、女子教育に献身する修道会を創立し、一八〇一年、アミアンに小さな学校を開きました。それが世界中に広がる聖心女子学院の始まりです。その後ヨーロッパ各地、北米、南米、オーストラリアを経て一九〇八年、四人のシスターによって聖心の教育が日本にもたらされました。

フランス革命の激動の時代を生きたマグダレナ・ソフィアは、女性たちが神の愛を体験し、世界の一員としての連帯感をもつて開かれた心で社会を変えることができると考えました。そのため、生活全般をとおして「しっかりと知識」「堅実な実行力」「謙遜な心」を育てる教育を目指しました。

その建学の精神・教育理念のもと、現在、学校法人聖心女子学院は「魂を育てる」「知性を磨く」「実行力を養う」という三つの柱を教育方針として掲げています。この三つの柱は並列しているのではありません。影響し合い、重なり、統合されて全人格的な教育を形成していくのです。

の循環を断ち切るのは、愛の循環しかないと思います。それに気づくことが教育の根本であり、同時に宗教性の中心のところだと思います。

その人がその人らしく開花するために

――「自身の経験から子どもたちに伝えたいことは?」

聖心会入会前に教師として三年間働き、その後修道生活についての自分の気持ちを確認するために一年間フィリピンに行きました。私の原点は、この二十代にフィリピンで過ごした経験だと思います。実際に体験して、感じることの大切さを学びました。

こうした体験学習は、世の中ではすぐに奉仕活動と結びつける傾向があるかもしれません。しかし、本当の意味での愛の奉仕に携われるようになるためには、気づく力を養う必要があります。まず、体験する。奉仕というのはその次のステップです。

実際に行つてみるとさまざま問題を感じるかもしれないし、人々との交流の中から自分にできることは何かを見つけることができないかもしれません。卒業生の中には、フィリピン体験学習のあとに進路を変えて医者になった者、

新しい状況を見聞きすることも多くあります。しかし、経済的に貧しい国だから、奉仕をしてあげるという気持ちでは行つてほしくないです。

――「これから宗教教育に求められるものはなんでしょうか。」

現代人は自動販売機的とでもいいましょうか、すぐ結果が出てくれることを求めてします。それは子どもたちばかりでなく教師や親も同じで、競争社会の中で振り回され、立ち止まって待つことができなくなっているのでしよう。

二十代のころの私は、生徒たちと一緒にいることが大好きで、テレビの青春番組の先生ながら若さに任せて生徒の中に飛び込んでいく教師でした。ところが三十歳を前にして、行き詰まりを感じるようになつたのです。何をやつてもうまくいかず、生徒との関係が

卒業後もフィリピンとのつながりを続いている者、また日本の地域社会のために活動している者もあります。

子どもの中にあるものを引き出し、それによって子どもたち自身が変容され、それが社会を動かす力になっていく、学校で本当に行わなければならない教育とは、そういうことではないか思います。

子どもの人格にはいろいろな要素が含まれています。その人がその

人らしくなるというのは、すべての要素が開花されるということだと思います。神が人間を創造した

その最大の目的は、その人がその

人らしく開花することにあり、そ

うすることによって、神に栄光を

帰することができます。

doing (何をするか) と have (何

を所有するか) ということに重きが

置かれている時代だからこそ、神

に愛されたかけがえのない私、

being の次元を大切にしていくこ

とが、これから宗教教育に課せられた使命であり、宗教教育だからこそその視点だと思います。

しつくりといかなくなつたこともありましたし、何も伝わらないと思つたこともあります。でもその経験がよかつたのではあります。若さだけでがむしゃらにやつてきて、それが通じなくなつたときには、はじめて教員として幅のある見方ができるようになつたのだと思います。教育には待つこと、そしてときには突き放すことも必要だということを学びました。

人間の人格にはいろいろな要素が含まれています。その人がその人らしくなるというのは、すべての要素が開花されるということだと思います。神が人間を創造したその最大の目的は、その人がその人らしく開花することにあり、そ

うすることによって、神に栄光を

帰することができます。

doing (何をするか) と have (何

を所有するか) ということに重きが

置かれている時代だからこそ、神

に愛されたかけがえのない私、

being の次元を大切にしていくこ

とが、これから宗教教育に課せられた使命であり、宗教教育だからこそその視点だと思います。

8